
10 《ディケイド》×40 《オールライダー》 仮面ライダーの世界

作者 B

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

10『ディケイド』×40『オールライダー』 仮面ライダーの

世界

【ZINEコード】

N6860Y

【作者名】

作者B

【あらすじ】

仮面ライダーをクロスさせるなら、『ディケイド』でよくね?という発想の元、「オーズ・電王・オールライダー レツッゴー仮面ライダー」の主人公にディケイドを加えてみました。基本原作通りの展開なので、目新しい展開はあまり期待しないで下さい。あと、映画を見てない人でも分かるように書いていくつもりです。

これが初投稿作品です。至らない点が多くあると思いますが、ご了

承下さ
い。

プロローグ（前書き）

「仮面ライダーは、無敵だ！」

「正義 仮面ライダー2号」

「V3がいる限り、野望は遂げさせん！」

「待つてくれ首領！貴方は人類を滅ぼすつもりか」

「見ていてくれ、オヤジ……」

「オレ、トモダチタスケル」

「天が呼ぶ！地が呼ぶ！人が呼ぶ！悪を倒せと俺を呼ぶ！」

「君も人生に命を懸けてくれ」

「人の夢の為に生まれた。この拳……この命はその為のものだ！」

「俺は……仮面ライダー10号」

「俺は改造人間、南光太郎！！」

「この世に光がある限り、俺は何度でも蘇る……！」

「行かなきや……誰かが俺に助けを求めてる……！」

「みんな一生懸命生きてるんだ。それを壊しちゃいけない」

「」パワーの戦士」

「これ以上、誰かの涙を見たくない」…」

「俺は戦つーアギトの為に、人間の為にー」

「誰かを助ける為だけに変身する」

「俺には夢は無い。でも、守ることは出来る」

「戦えない、大勢の人の為に……俺は戦つー」

「鍛えてますからっ」

「俺は既に未来を掴んでいる。そして「これからも……掴み続ける」

「俺、参上!」

「誓を守つてみせる」

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけー」

「「ああ、お前の罪を数えろー。」」

「樂して助かる命がないのは、何処も同じだな

『』『』『』変身ー』『』

プロローグ

「あ～、じつや駄目だ。一度ばらして修理しないと」

そう呟いたのは、光写真館を営んでいる”光栄次郎”だ。

「ああ、直るんならそれでいい。修理の間、代わりになるカメラを貸してくれ」

返答したのは居候の”門矢士”。ビリヤー、彼のカメラが壊れてしまつたらしい。

「別にいいけど……レンタル代も含めて、きちんと払ってくれないと困るからね」

「わかったわかった

「じゃあ……はい、これ代わりのカメラ。僕は修理してくれるから」

そう言つて、栄次郎は土にポラロイドカメラを渡し、奥の部屋へ入つてこぐ。

「さて、暫くはこれで我慢するか

「我慢するか、じゃないですよーーいい加減溜まつた付けを払つて下さい！」

士に怒鳴っているのは”光夏美”。栄次郎の孫で、この写真館で祖父と一緒に働いている。

「わかつてゐつて」

「もう!士君のわかつたは當てにならないんですから。はあ、コウスケも里帰りしちゃいましたし」

コウスケとはこの『真館のもつ一人の居候である。しかし、今回は登場しないので割愛する。

「お陰で口うるさるのが居ないから、最近は静かでいいな

「もう!そんなこと言つては駄目ですよ!」

「その通りだぞ、家臣その6。私の世話をする者が一人減つてしまつたのだからな」

「誰が家臣だ、誰が……ん?」

光写真館で暮らしているのは4人。では、今の声の正体は何なのか。ふと土が振り返ると

「降臨。満を辞して」

白い鳥が立っていた。

「貴方はジーク!?」

「おい、鳥!何でお前が居るんだ!」

二人は以前面識があるが、余り良い思い出がないため、とても嫌そ

うな顔をしてくる。

「家臣の為にこの私田へ出向いたのだ。茶の一ヶ月ぶりに出せんのか、
家臣そのもの」

「お前なあ～ツ！」

「落ち着いて下さる、士君……それで……士君の為つて、どうこうい
とですか？」

夏美が質問をすると、ジークは近くの椅子に腰かけ話し始めた。

「届け物だ。ほれ、これはお前の物だろ？」

そつまつて、懐からあるものを取り出す。

「これは……士君のカード？」

それは、絵柄の描かれていないカードだった。

「そうみたいだな。おい！このカード、どこで拾つたんだ？」

「ん？ そうだな、あれは確か……」

士の質問に対し、ジークは回想に入る。

「1～6ヶ月前の晴れか曇りか雨の日だったなあ

「……つまり覚えて無いんですね」

「使えない鳥だ」

これ以上の質問は無意味だと士は思い、渡されたカードを眺める。

「そのカード、これから何が起こるのじょつか？」

「さあな。わかっているのは、また新しい旅が始まるつてことだけだ」

そう言つと、士はカードをしまつ。

「今日は栄次郎は居ないのか？また私の美しい姿を写真に収めて貰おうと思つたのだが……」

ジークはそう言いながら部屋を徘徊する。

「ああ、そんなに歩き回ると

「ぬおつ！」

「士君、これは……」

ジークの足が背景幕の紐に引っ掛かり、そのまま倒れる。
そして、背景絵が次の旅路を示すべく現れる。

「士君、これは……」

そこに映るのは、28人の戦士がズラリと並んだ姿だった。

「これは……”仮面ライダーの世界”」

今再び、士 仮面ライダー ディケイド の新たな物語が始まる。

仮面ライダーの世界

「くわづーあの鳥、後で覚えてろー。」

「でも、ソレは一体何処なんでしょう~。」

士と夏美は街の外れにあるアリーナの近くを歩いていた。
何故そんな所に居るかといつと、それは数分前に遡る。

『おー、家臣その。わざと茶を用意しね』

『誰がやるかー。』

『士君落ち着いて下れ　　え？地震ー？』

『何だー？』の揺れは何事か！？』

『おい、落ち着け！』

『ジーク、そんなに暴れると危ないですよー。』

『うるせー。家臣そのー。わざと揺れを収めたりー。』

『じゅつ、押すな　　わづー。』

『士郎ー..めやつー..』

やつして家から追い出され、気付いたら此処に居たところわけである。

「それにも士郎。今日は服が変わりませんでしたね」

行く先々で服装が「ロロロ変わる士だが、今日は何時もの私服である。

「ああ。まあ、当然といえば当然だな」

「え? それはどういって」

『キシャーッー..』

「一」「一」「一」

ことですか?と言ひ切る前に、明らかに人間の物ではない声に遮られた。

「今は……」

「士郎ー..あつちですー..」

夏美が声のした方を指し、二人でそこへ向かつ。

「あれは一体……」

そこでは、力マキリを擬人化したような怪人と、黒を基調とした赤黄緑の上下3色の戦士が戦つていた。

「あいつは、”仮面ライダー〇〇〇”^{オーズ}」

「オーズ？」

「ああ。欲望の結晶”コアメダル”を駆使して戦うライダー。3枚のメダルを組み合わせることで、ありとあらゆる状況に対応することができる」

士はポラロイドカメラで写真を撮りながら説明口調で話す。

「オーズ……つまり、ここにはオーズの世界なんですね？」

「いや、違う」

「…ビデオ」とですか？」

夏美の疑問に、士は出てきた写真を眺めながら答える。

「ここは仮面ライダーの世界。あらゆるライダーの物語が重なり合う場所だ。ほら、見てみろ」

「え?……あつ、士君の写真が!」

渡された写真には、今戦っているオーズの姿がピンぼけせず元に写つていた。

「……は俺の世界とも重なつていて。だから写真もちゃんと写る」

『トリプル スキャニングチャージ』

『セイヤーッ！』

「おつと、向こうも終わつたみたいだ」

再びオーズに視線を戻すと、先ほどのカマキリ怪人 ヤミーを倒していた。

「さて……とりあえず会つてみるか」

「そうですね」

二人はオーズに向かつて歩きだそつとした。すると……

「おいお前ら、何をやつてこる」

金髪に白いシャツ、赤いジャケットを羽織つた男に呼び止められた。

「あつ。あの、私達は」

「お前……グリードか」

「…」

士の言葉を聞いた途端、男の目が見開いた。

「グリード？」

「ああ。数枚のコアメダルと無数のセルメダルでできている怪人だ。
どうやらオーブとは協力関係にあるようだか……」

そこまで言つと、男は威嚇するような眼で士を睨む。

「貴様……一體何者？」

『ぐあつー』

「ぐあつー」

オーブの声に振り返ると、オーブは先ほどのヤギーとはまた別の、
3体のモグラの怪人に襲われていた。

「何やつてんだ、映司！」

『アンク！何かこいつら変なんだ！メダルを出さない』

「なんだと？」

アンクと呼ばれた男と映司 仮面ライダー オーブ には、見覚えの無い怪人のようだ。しかし士と夏美は、それをよく知っていた。

「あれはイマジン？まだ居たのか」

「士君ー！」

「ああ」

士はベルトを腰に装着し、ライドブッカーからカードを取り出す。

「変身!」

『kamen rider Decade』

カードをベルトに入れると、電子音と共に士は仮面ライダー・ディケイドへ変身する。

「お前、一体……」

アンクの唇に答えることもなく、ディケイドはオーズのところへ向かう。

「くそつ、Jのままじゃあ……」

オーズは、連戦に加え3対1の状況のため苦戦していくようだ。

「うわっ! 離せ!」

オーズが2体のモール想像に捕まり、3体目が攻撃を仕掛ける。

「うわっ!」

そしてそのまま吹き飛ばされ、地面を転がる。

「オオオー」

モールイマジン達は、ジリジリとオーズにどごめを刺すべく近づいていく。その時

『attack ride blast』

電子音が鳴り響くと、銃撃音と共に弾丸がモールイマジン達に当たる。

「！？」

突然の銃撃に、オーズは撃ち手がいるであろう方向へ振り向く。

「危なかつたな」

そこには、ピンクと白のボディに十字のラインが入った仮面ライダーI、ティケイドが立っていた。

「貴方は一体……」

「通りすがりの仮面ライダーだ」

「仮面、ライダー？」

オーズが立ち上ると、イマジン達も立ち上がり再び戦闘体勢に入る。

「いぐぞ」

『 attack ride slash』

ライドブッカーが剣の形に変わり、ディケイドはそのままイマジンに向かつて走り出す。

「はあつー。」

ディケイドが、向かつてくるイマジンを同時に切りつける。イマジンも反撃しようとするが、全てかわされ、もしくはガードされて攻撃が通らない。

「す、じい……」

オーズからそんな言葉が漏れた。今まで多くのヤニーと戦ってきたオーズ。しかしディケイドからは、それを上回る程に戦い慣れしているように見えた。

『 final attack ride D D D Decad e

ディケイドがジャンプすると、イマジンとの間に10枚の等身大のカードが並び、そのままイマジンに向かつてディメンションキックを放つ。

「はああああっー！」

「オオオーッー！」

そしてイマジンの1体に当たる、その場で爆発する。

「オオーー」

「オオオーー」

それを見た残りの2体は、これ以上は危険だと判断し逃走を謀る。

「あつー！待てー！」

オーズは逃げたイマジンを追つた。

「あいつら、何処行ったんだ？」

イマジンを見失ったオーズは、辺りを見回す。

「うわああー！」

すると突然、子どもの悲鳴が聞こえた。

「あつちかー！」

オーズは悲鳴の聞こえた方へ走り出す。

「オオー」

そこには、1人の少年とそれに襲い掛かっているイマジン達が居た。

「危ない！」

すると突然少年の身体から裂け田が生まれ、イマジン達はその中へ入つていった。

「え？」

唐突な事態に一瞬思考が停止するオーズ。すると、少年が崩れるよう、その場に倒れる。

「あっ！君、大丈夫！？」

少年の身を案じ、すぐさま駆け寄るオーズ。

『フアアアーン！』

その時、汽笛と共に空から電車がオーズの居る方へ走ってきた。

「な、何だ！？」

電車はやがてオーズに沿うように停車し、その中から1人降りてきた。

「君は……」

青と銀のボディに鋭い赤色の目、その名も”仮面ライダーネオ電王”。時の規律を正すライダーである。

少年にバスを齧すと、イマジンが飛んだ過去の時間が表れる。

「1971年11月11日か。今から40年前だな」

「こんな子どもが、何故40年前の記憶を？」

変身を解除した”野上幸太郎”と相棒のイマジン”テディ”が少年を介抱しながら話し合つ。

「あの……」

そこに変身を解除した火野映司が話し掛ける。幸太郎とテディも映司の方へ振り返る。

「君達は、誰？」

「あんた……誰だ？」

「おい、それはこいつの台詞だ！」

鸚鵡返しのように質問をした幸太郎に対し、苛ついたような口調で会流したアンクが返す。

「そいつは仮面ライダーオーズ。ここを守っているライダーだ。それと……お供のグリード、アンク」

すると、声と共に映司達の後ろから士が歩いてきた。

「お前は、さつきの……って誰がお供だ誰が！」「またあんたか。今度は何の用だ？ ディケイド」

「そう言つたな。それに、今回は俺が先客だ」

士は以前、電王の世界で迷い込んできたジークを返しに行つた際に、一度幸太郎と会つてしているのである。

「ディケイド？」

「ああ。俺は門矢士 仮面ライダー・ディケイドだ」

映司の疑問に対し自己紹介も兼ねて答える士。

「じゃあ、そっちの君は？」

「野上幸太郎、仮面ライダー電王。俺もライダーだ。あんたと同じな」

「電、王……」

突然の状況に唖然とする映司。

「イマジンは俺達が責任をもつて始末する」

「後ろの奴も言つてたが、そのイマジンってのは何だ?」

「それは私が説明しよう」

アンクの質問に對し、テディがそれを引き継いで答える。

「イマジンは契約者の記憶を辿つて過去へ飛び、自分達の都合の良いように歴史を変える」

「で、俺達がこの『テンライナー』に乗つて時間を飛んで、イマジンを始末するってわけ」

テディの説明に幸太郎が補足する。

「それじゃ、俺達はこれで」

そう言つて、幸太郎とテディは電車『テンライナー』に乗り込む。

「おー、映司。俺たちも行くぞ」

「え? つてちよつと待つて!」

アンクも一人に続き、そのさう元後を映司が追つ。

「電王の世界の旅は終わったんだが……一応乗つてみるか」

そして、土もテンライナーに乗り込んだ。

仮面ライダーの世界（後書き）

補足説明

野上幸太郎

仮面ライダー電王”野上良太郎”の孫であり、現在良太郎の代わりにN.E.W.電王としてイマジンと戦っている。良太郎と同じ特異点である。良太郎と違いモモタロス達が憑依して変身しても、イマジン達が武器に変わってしまい憑依も解ける。

テディ

幸太郎と契約しているイマジン。幸太郎に憑依することは無いが、先端に銃口の着いた銃剣に変身し武器として戦う。

一枚のメダル（前書き）

補足説明

仮面ライダーの世界

”仮面ライダーディケイド”の世界観ではライダーの世界はそれぞれが独立している。しかし今回の”レツッゴー仮面ライダー”では、1号、2号……オーズまで全て同じ世界の物語となっているため、『ライダーの物語が重なる世界』＝『仮面ライダーの世界』とした。（ぶつちやけこじつけです）

一枚のメダル

「デントライナー車内

「はい、ドービー♪」

「わーい、やつたーー！」

デントライナーの密室乗務員、ナオミがドービーを配つていき、それを紫のイマジン リュウタロス が最初に受けとる。

「ありがとうございます。……あれ? ナオミちゃん、カップが多くない?」

次に受け取った青いイマジン ウラタロス が、何時もより多いカップを見てナオミに問い合わせる。

「これはですねえ、あちらのお密せんの分ですよ

「お密せん?」

そういつつ、ナオミは奥に居る乗客にドービーを配りに行つた。

「はい、どうぞ」

「あつ、ありがとうございます。」

そのドービーを受け取ったのは、先ほど乗り込んだ映司とアンクだ。

「ああん? 何なんだお前ら」

その一人を見て、赤いイマジン モモタロス が突つ掛かつてきた。

「あ、いや、アンクが電王の仕事手伝えって言つから……」

「はあ? アンクだかタンクだか知らねえが、余計なお世話なんだよ!」

「お世話だー」

「それと……」

モモタロスの言葉をリュウタロスが煽る。

モモタロスはそのまま振り返る。

「なんでもめえまで居るんだよー」

今度は、いつの間にか乗り込んでいた士に突っ掛かる。

「相変わらず騒がしい奴だ」

「ああん! ? やんのかコラアー! 」

「ちよつと、落ち着いて! 士君も喧嘩を売らないで下をこー! 」

喧嘩腰の一人を仲裁する夏美。

「落ち着きなよ、先輩。それで……君たちは何で乗ってるの？別に手伝いに来たとかじゃないんでしょう？」

「ああ。セイを開けてみれば解る」

士が指したのは、テンライナーの客車の後方の扉だった。

「へ・ビ・う・こ・う意味だ、そりや？」

疑問に思いながらも、モモタロスは扉を開けた。

「なんだこりゃ あああーー！」

モモタロスの目の前には、一軒家の客間のよつた部屋が広がっていた。

「じゅうやい、テンライナーと光写真館が繋がってしまったみたいなんですね」

夏が補足で説明をする。

「ふむ。よく来たな、家臣どもよ」

「あー手羽野郎！なんでてめえまでいやがるー！」

「ああ。そいつ、二つに紛れ混んでたんだ。引き取ってくれ

「二つちだつて願い下げだー！」

「家臣ども、苦じゅうなこ」

「お前は黙つてろッ！」

「あはは。何か賑やかだな、アンク」

「映司、あの出来損ないのヤマニーを黙らせる。わざから煩くてイライラしてくる」

「誰が出来損ないだ！？誰が！」

「否定するのはヤマニーの方でしょ？前半は合ひてる」

「ああ、確かに……つむじうつう意味だ、亀！」

モモタロス達が騒いでいると、前の扉からオーナーが現れた。

「乗つてしまつたからこま、仕方ありませんねえ」

そう言いながら、持つていたステッキでモモタロスとウラタロスの取つ組み合いを止める。

「しかし、過去への介入は絶対に許しません」

今度はアンクと映司を見ながら話す。

「場合によつては、とんでもない」となつてしまこまゆ

「やうなんですか！？」

オーナーの言葉に驚きの顔を上げる映図。

「ええ。ですから、絶対にテンライナーからは……降りないで下さ
い」

オーナーは再び、特にアンクを諭すよついで、忠告をした。

1971年11月11日

「オオー」

「オオオー」

「見つけた! いくぞ、テテイ! 」

『ああ』

NEW魔王に変身した幸太郎と剣に変身したテテイはテンライナーから降り、見つけたイマジンと相対する。

『幸太郎、タイムは?』

『もうだな……』

そう言いながら、2体のイマジンを見る。

「12秒あれば十分だな」

『おもしろい』

「いくぞー！」

『12、11、10……』

テディのカウントダウンと共にNEW魔王がイマジンへ向かっていく。

「…………あの、大丈夫だつて。俺、ここから動かないから」

映司は今、モモタロス達に囮まれていた。

「あかん」

最初に口を開いたのは、黄色のイマジン キンタロス だ。

「オーナーから絶対に田え離すなって言わてるんや…………」

「Z

「寝るなバカ！」

キンタロスにツツコミを入れるモモタロス。

「おい」

「お前はともかく、その金髪トサカは信用ならねえ」

「おいつて」

「それを言わると……」

「おいつて！」

「うつせえー何だ！」

さつきから呼び掛けていた士に、モモタロスが返事をする。

「アンクならもう居ないぞ」

「何言つてんだ。此処にしつかり……ん？トサカが黒いぞ？」

「！アンクが居ない！何処行つた！？」

アンクは現在右腕しか復活して居ない為、人間の肉体を借りていた。よつてアンクは腕だけでも動けるのだ。

「それならほら、そこだ」

士が窓の外を指すと、そこには脱走したアンクがいた。

「あーつー連れ戻さないと！」

「よし、行つてこい。」

モモタロスにそう言われるや否や、映司はアンクを捕まえに外へ飛び出す。

「あれ？ 田を離しちゃ不味いんじゃないの？」

「あーーーしまつた！ いくぞお前ひー。」

そのあとをモモタロス達が追う。

「土君、私達も……」

「まつとけまつとけ。あいつらだけで十分だ」

土は完全に傍観の姿勢のようだ。

しかし、この出来事が後の大事件を生むひとつの時誰も想像すらしなかった。

「はああああー。」

NEW電王が走りながらイマジンを切り裂き、イマジンはそのまま爆発する。

「ふう……ん？ 一体足らないぞ」

一方映司は……

「見つけたぞアンク！外に出たら駄目ってオーナーに言われただろ
ー！」

メダルを持つて宙に浮いているアンクを掴みながら、文句を囁ひ映
司。

『つるさい！この時代なら、まだ他のグリードは田覚めてない。メ
ダルは取り放題だ！』

「やっぱり、そんなことだらうと思つたー・さあ帰るぞー！」

逃れようとするとアンクとそれを止める映司で縄引きの状態になつて
いた。

「オオー」

「つわつー！」

そこへ、NEW魔王から逃げてきたイマジンとぶつかり盛大に転ぶ
二人。

「見つけた！はあああー！」

追ってきたNEW魔王が、イマジンを一刀両断する。

「オオーッ！」

そしてそのままイマジンが爆発する。

「うわあああッ！」

二人は爆風で吹き飛ばされ、アンクの上に映司が落下し、思わずメダルを離す。

『映司！邪魔だ、どけ！』

「お前ら、いたぞ！」

すると向ひからモモタロス達が追いかけてきた。

『不味い！』

「僕に釣られてみる？そりゃー。」

逃げよつとするアンクを、ウラタロスが網で捕まる。

『離せー。』

「もつ逃げられないよ

「大人しくしろー。」

そうして退散していく一行

「.....イーツ？」

その場に一枚のメダルを残して

.....

一枚のメダル（後書き）

作中でアンクがヤミーを作りはじめている場面で、「まだこの頃のアンクってヤミー作れないんじゃないの？」と思われるかもしれません、原作でもやっていたのでそのままにしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6860y/>

10《ディケイド》×40《オールライダー》仮面ライダーの世界
2011年11月27日15時56分発行